

白薔薇の歌

朝森 顕

薔薇は病気だった。

どんな魔法使いも医者も、それを治せないと言った。王妃はそのために寝込んでしまった。国中が、そのバラの咲くことを期待していたのである。

薔薇はそのまま何年も宮廷内に置き去りにされ、秘密の園でそっと、そのときを待っていた。すでに国中の殆どすべての人が汚れない美しい薔薇の存在を忘れ去ってしまっていたが、その園の管理を任された庭園師の若い青年だけが、毎日、

「君は病気ではないよ。White rose！」

と、彼女に語りかけた。薔薇はその言葉を信じた。

数年後、その真っ白な薔薇は世界のどんな薔薇よりも美しく咲いた。美しさは冬に溶けていた。薔薇はただ、彼だけにその美を伝えようとしていた。

冬の神はその姿を見ていた。神は薔薇のあまりの美しさに、薔薇を大きな真っ白な雪に変えて摘み取ってしまおうと考えたが、夜の闇を切り裂くように、薔薇は冬の神に懇願した。

「どうか、私を人間にしてください！」

冬の神は、驚き、次に訝しんで訊ねた。

「そなたは神も嫉妬するほどに美しいのにどうして、あんなに貧しく醜い人間になどなろうとするのだ。」

薔薇は答えた。

「申し上げます。それはただ一つ、咲かない私を信じてくれたあの庭園師のためでございます。あの、彼の愛に答えることだけが私の望みだからでございます。」

薔薇は冬の神の冷たい風に震えながら、力の限り胸の内を叫んだ。風はほんのしばらくの間、止み、遠い所からまた冬の神の声が聴こえた。

「よかろう、White rose！そなたの願い叶えよう。人としてのそなたの愛が、どの程度のものかこの私が見届けてやろう。」

次の日、薔薇は秘密の園の泉の傍で、降り積もった雪よりもさらに白い美しい娘として、生まれ変わった。同じ時刻、庭園師の若い青年は、秘密の扉を開けて庭の狭い通路を歩いて来る。

薔薇は彼に届くようにと、命を、魂を、肉体の全てを吐き出すように、力の限り、空に向かって歌を歌った。それは、冬の神への感謝の歌であり、彼への愛の歌だった。声は彼へ届いた。

朝、雪が視界を静かに侵し、霧が情景を微かにまどろませる、——その朝に、庭園師は神の子のように、天使のように美しい裸の娘をみつけた。

娘は微笑んでいた。

庭園師はその微笑を知っていた。いつでもすぐ傍にあったあの微笑だった。微笑みの意味を彼は考えないようにした。それが正しいことだと思ったのだ。スコップを持つ彼の手は震えていた。

彼は娘に駆け寄り、粗末な重い皮のコートを着せた。娘は震えながらそれを引き寄せ、無防備な彼を抱き寄せた。人は愛しいものを抱き締めることが出来るのだと、薔薇は知っていた。薔薇にはそれが倅せだった。指先から、髪の毛の先まで、全てはもっと自由な愛の表現だった。

薔薇は歌い続けた。それは誕生の歌だった。

生まれて来たのだと。

こんなにも遠い場所から、たった一つを捜し求めて、こんなにもいっぱい。

生まれてきて倅せだと。

神を信じていると。

彼を愛していると。

今、確かに生きています。

この日のために生まれて来たのだと。

あの雪が私たちを祝福しているのだと。

この霧が私たちを溶かしているのだと。

私の愛の病は今、ようやく治ったのだと。

私は今、愛に包まれている。

私はこの胸にある、たった一つの約束を歌っているのだと。

end.